

連載7回目 (2013.12.24)



夕刊  
発行所  
神戸新聞社

神戸新聞  
夕刊一面  
「随想」

神戸ルミナリエの時期が来ると、19年前を思い出す。

大好きな神戸が阪神・淡路大震災に見舞われたとき、私は美術大学の1年で、東京で暮らしていた。数週間後に戻った故郷は、がれきと化していた。変わり果てた街を歩きながら、自分の無力さを痛感し、「神戸のために何かできる人間になりたい」と強く思った。それが今の仕事につながっている。

その後の美大での過ごし方は一変した。アートだけでなく、街づくりや建築にも興味が出て、さらにはそれを総合的にプロデュースする人物が、

### 「あの日」から始まった

——星加 ルリコ

とても重要な役割を担っていることを初めて知った。

卒業後は、東京の都市計画会社に就職し、ボスに企画やデザインのイロハをたたき込まれる毎日。「100年後の人たちにも、責任がもてる仕事をしなさい」と言われ、クラクラと気が遠くなつたのを覚えている。

独立を機に神戸を拠点にし、行政や企業のブランドづくりやプロデュースに携わらせていただけ

ることに、心から感謝している。

忙しい毎日の中でも仕

事を仕事と割り切らず、どんなときでも楽しんで、私らしくありたい。

そう思えるようになったのは、日々の暮らしの大切さを痛感した、あの震災の体験があったからだ。

19年前のルミナリエ初点灯の瞬間、美しい光に包まれた神戸の友人はみな、さまざまに思いが溢れ出して号泣したという。

私の心に灯った小さな光も、いろいろとお役に立ちながらもっと大きなものにできるよう、今後

も大好きな神戸との関わりを継続していきたい。  
(ほしか・るりこII 企画・デザイン会社社長)

随想